

まだタイトルが決まってない不定期で出す異世界物語り

シグ(ノッ・ω・)ノッ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

俺は不知火陽炎（しらぬいかげろう）

俺の人生とも言っても過言ではないあるオンラインゲームをしていたら急に視点が暗転したと思っただらいつの間にか森の中にいた。

「え!?なにこゝ!?!」

と辺りを見渡すも間もなく周りには下卑た笑みを浮かべたゴブリンのような物体が数匹不知火を囲うようにいた。

「ひい!?な…なんだお前ら!!僕は食べても美味しくはないぞ!?!」

と言った感じでよくある異世界物語

# 目次

第1章：出会い	1
2話 知らない男が仲間になりたそうにこちらを見ている	4

## 第1章：出会い

「さあ…弔い合戦といこうか」

と誰でもない誰かにポツリと言い残すと辺りは灼熱の地獄と化した。

これは数十年も前の事になるが書き残しておこう。

それは、もし私が死んでしまつたら語り継ぐものがいなくなるからだ。

おかしな話だよ私もこんな物に遺しておくなんてついで思わなかつただろう。

現に今も私は筆を握る震え手を止めたい位だ。だが私は「…」の事を気に病んで仕方が無い。

この様な書物を数年前の私が見たら腹を抱えて笑うであろう。「私がこの様な馬鹿げたことを書くなんてありえない」とね。

だからこの様な書物を書くのはこれで最初で最後にしよう。

題名はそうだな：

これはある異世界から来た少年と化け物と呼ばれていた娘の冒険譚…とね

俺は不知火陽炎（しらぬいかげろう）

俺の人生とも言つても過言ではないあるオンラインゲームをしていたら急に視点が暗転したと思つたらいつの間にか森の中にいた。

「え!?なに!?」

と辺りを見渡すも間もなく周りには下卑た笑みを浮かべたゴブリンのような物体が数匹不知火を囲うようにいた。

「ひい!?な…なんだお前ら!!!ぼ…僕は食べても美味しくはないぞ!」

と不知火の言葉が通じたのか周りのゴブリンらしき物体はニタニタ笑うだけで何もしてこない様だ。

（なんだ…お前らもあの世界と同じなのか…やっぱり僕はどこの世界にいても同じ目にしか合わないのか…もういいよ!!!なんで僕を放つて置かないんだよ!!!そうやって気持ち悪い顔で僕を見るなよ!!!」

と言つたところでゴブリンらしき物体はニタニタ笑みを浮かべな

がらジリジリと不知火の方へ近づいていく。

「ひい!?…来ないでくれ!」

と声を荒らげた刹那ゴブリンの首が宙を舞った。

「え…?」

と不知火が瞬きをする間もなく死んで逝く物体に視線を下すとふと首に鋭利なナニカを突き付けられているのに不知火は気づく

「ひい!?!むぐ!?!」

「貴方はこの森を荒らしに来たの? そうなら今ここで果ててもらおうけれど?」

と明確な殺意と共に人を殺せる様な鋭利なナイフが首に当てられる。

「ぼ…ぼくはそんなつもりじゃ!?!」

「貴方に弁解の余地は無いのよ? 普通なら何も言わずに殺してる所なのに私がわざわざ聞いてあげてるの? この意味分かる??!」

コクコクと首を縦に振るしか出来なかった。

「ならもう一度質問するわよ? 貴方はこの森を荒らしに来たの?」

「ぼつ…ぼくは気付いたらこの森にいてさっきの奴に囲まれてて気付いたらそいつらも死んでて…」

「ふーんあつそ」

と言いつの者が去ろうとすると

「ちよつと待ってくれ! あ…待って下さい!!!」

「なに? 私は忙しいのだけれど?」

「お…おれ!…ここに来たばつかしでなにもわからないんだ! 良かったら教えてくれないか!?!」

と恐怖で覚束無いながらも目の前に居る黒髪の少女に問いかける

「ふーん…貴方も捨てられたのね可哀想に」

「べ…別に捨てられたんじゃない…」

同情しているのだろうか、アサギと言う少女の目はどこことなく自分と似ている様な気がする。

だが同情してないだろう、颯爽と明後日の方向に体を向けて立ち去ろうとした時、静な森林にグウウウと大きな腹の音が聞こえた。

その音は間違えなくアサギの腹の音だった。

その後ずつと見ていると、アサギが、

「貴方家事は得意かしら？」

「得意だけど」

「なら仕方ない。私と一緒に来い、此処での垂れ死なれても困るからな。」

表情ひとつ変えずに頼むとは、これが世に言うツンデレか…いや違うような

なんて考えていると、アサギが首筋を掴まえて俺を引っ張って行く。

不安と期待でと言うよりも不安の方が優っていたがああ細腕からは考えられないような力で引きずられていくのであった。

2話 知らない男が仲間になりたそうにこちらを見ている

昨日助けてくれた少女、アサギの家にて居座ることとなった。

家事や料理などはアサギが全般行うらしい（本人談）のだが、居候の身で何もしないのは気が引ける為、アサギに代わって家事や料理などをやる事にした。

こう見えて学校や私生活では、誰にも家事や料理に負けたことがない程自信がある。

と言っても家電があるわけないから、最初はアサギ教わりながら洗濯とかやってたし、この世界の調味料、食材を勉強したりなど色々。

・ 流石に狩りなどはアサギに任せているけど。

今は食糧が足りなくなった為、森に近い町へアサギと共に買い出しである。

買い出しに行く前にアサギから教えて貰ったこの世界のお金の単位はコルと呼ばれるもので銅貨・銀貨・金貨があるそうだし

まいどー。

と購入した食材を袋に入れ、何枚かの銅貨を巾着袋にしまう。

アサギから貰ったメモを確認し、次の食材を買いに店向かおうとした時、誰かにぶつかってしまい、その場に倒れ込む。

不知火「あ！ごめんなさい！」

不知火はぶつかった相手に直ぐに謝るが、ぶつかった相手はどうやら騎士のようだ。

「てめえ！何処に目をつけてんだガキ！」

怒りを露にする騎士は不知火の首根っこを掴み、大衆の前で持ち上げる。

不知火「…ぐっ！」

首根っこ掴まれてる不知火は苦しみ、話すこともできないでいた。

「は…離せっ…!!!」

と不知火がもがいていると、

アサギ「それ私の連れなんだけれど？」

騎士「つ！なんだ貴様!?この私に楯突こうとしているのか!!」

アサギ「そうだと言ったら？」

騎士「ふ…ふはは！この私が貴様の様な小娘如きに負けるとでも？」

アサギ「貴方のような騎士に負ける筈は無いのだけれど？」

騎士「言わせておけば！…よし、気が変わったこのガキの前に貴様を肅清つ…!!」

騎士が話し終える前に、アサギが騎士の脛を蹴りあげ、怯んだ隙に不知火が抜け出しをアサギの元へと駆け寄り

不知火「ありがとうアサギ」

アサギ「別に助けたわけじゃない。あなたがいなくなったら、せつかく家事やつてくれる人がいなくなつて困るから」

私情にて助けてくれたアサギに対し不知火は、

不知火「そうですか」

ただそれだけだった。

脛を蹴られうずくまっていた騎士の男は、懐についている剣を鞘から外し、不知火ではなくアサギを袈裟斬りを放とうとしていた。

それに気づいた不知火は、咄嗟にアサギの前に飛び出し、アサギの壁になろうとし

もう目の前に来ていた騎士剣の刃に対し、目を瞑る不知火だったが、その刃は不知火には届く事は無かった

「子供に剣を向けるとは、王兵騎士も落ちぶれてるな」

見知らぬ男性が、剣を持っていて腕を止めていた。

「なにしやがる、お前も斬りたいのか!」

「俺はいいが。だがな、子供に相手にそれを振るうには玩具が違いすぎると思うが？」

と言い男性は騎士の腕を曲げてはいけない方向へと曲げる。

剣は手から離れるが、大きな痛みと共に、大きな悲鳴を上げる中、群衆が男性を見てざわめき始めるが、群衆奥から他の騎士達もやって来た。

「よしっ！逃げるか！」

と明らかに場違いな笑顔とともに不知火とアサギの手を引き入り組んだ街の中に連れて行かれるのであった。